

40年超えの 老朽原発再稼働は 危険だ！

■高浜原発1・2号機は40年超え

福島第一原発の過酷事故後、国は原発の運転期限を原則40年とする「40年ルール」を決めました。が、それには例外規定があります。原子力規制委員会が認めれば1度だけ最長20年延長できるというものです。そして関西電力は運転開始から40年を越える高浜1・2号機について延長を申請し審査が進んでいます。

■耐震試験は後でいい！？—でたらめな規制委の審査

高浜原発1・2号の場合、今年7月の期限までに、安全対策の基本方針の許可、工事計画の認可、運転延長の認可の三つが必要です。それが揃わなければ廃炉になるはずですが……。

新基準は、耐震設計のもとになる地震の揺れの想定が550ガルから700ガルに引き上げられています。格納容器内の蒸気発生器には3000本以上の細管があって、冷却水の水が細管を流れています。それが漏れて冷却ができなくなれば、メルトダウンを引き起こす可能性もあります。

蒸気発生器の揺れがどれくらい早くおさまっていくかについて、これまでは、1%ずつおさまっていくと想定していました。けれども、地震でより大きく揺れると厳しく想定すると、1%という数字を使った計算では、蒸気発生器は大丈夫と言えなくなりました。



2016年5月20日

STOP原子力★関西電力

ブログ：<http://stop-kanden.seesaa.net/>

連絡先：東大阪市源氏が丘16-10 源氏が丘教会気付

そこで、関西電力は、「3%ずつ揺れがおさまっていく」に変えたい、と原子力規制庁に言いました。それに対して原子力規制庁は、実際の原子炉と同じ規模で試験して、本当に3%ずつ揺れがおさまっていくということを確認することができればいい、としてしまったのです。

この試験の時期を、規制委は、工事計画認可を経て対策工事が終わった後の設備検査の段階でよいとしました。

実際に揺らす試験で耐震性が不十分となれば、設備検査を通ることができず、再稼働できなくなりますが、関電は新たな耐震対策を追加して工事計画認可を受け直すことができ、運転延長の認可は覆ることがありません。まずはじめに「再稼働ありき」の「審査」です。

参考：「原子力規制庁に聞きました。老朽原発の審査、どうなっているの？編その2 審査のズルを問う」

<http://www.greenpeace.org/japan/ja/news/blog/staff/2/blog/56420/>

■中性子線が当たって脆くなる原子炉压力容器

老朽原発は、高温、高圧、高放射線（特に中性子線）に長年さらされているので、配管等の金属が極めて脆くなり、腐食も進んでいます。配管は交換できますが、压力容器は交換することができません。压力容器は鋼鉄できています。鋼鉄は通常粘り気がありますが温度が下がると固くなって脆くなります。压力容器は、長年中性子線が当たることによって鋼鉄の粘り気がなくなる温度が上がってきます。

事故が起きて緊急冷却しなければならなくなったとき、どうなるでし



うか？温めたガラスコップに氷水を注いで急激に冷やすと、ガラスコップにひびが入って割れてしまいます。そのような現象が压力容器でも起こりかねないので

す。 廃炉を決めた美浜

1号炉は運転開始が1970年。開始時の粘り気を失う温度は-50℃でした。それが31年後には81℃にまで上がりました。

高浜1号機は1974年、2号機は75年に運転を開始しています。美浜1号機と4, 5年しか違いません。それなのに20年も延長してほんとうに大丈夫でしょうか？

40年以上も中性子線に曝された圧力容器、しかも2011年から5年も停止していた原発を動かすことは絶対にあってはなりません。

建設当時の技術者もほとんど退職し、当時の記録が散逸している可能性もあります。そんな状態で十分なメンテナンスは不可能です。老朽原発の再稼働をとめましょう。

400年前にもあった東北一熊本大地震



川内原発を今すぐ止めよう 伊方原発動かすな！

「AERA 2016年5月2日-9日合併号」で歴史学者・磯田道史さんが今回の熊本で起きた大地震は過去にもあったと述べています。2011年東日本大震災から今回の九州大震災までの一連の状況が、江戸時代初期の17世紀前半とかなり状況が似ているそうです。以下要約。

●1611年に「慶長の三陸沖地震」が東北地方で起きました。これは東日本大震災と同タイプの東北沖の海溝型巨大地震で、津波による多数の死者が出た。

●その8年後に、今回と同じ肥後地方で、一つの都市が壊滅するような大地震が起きた。熊本藩の地誌「肥後国志」14巻には「卯の刻（午前6時）より大地震い、午の刻（正午）にいたり、城楼崩壊す」とある。

この城楼とは、八代にあった麦島城のこと。最初の地震から数時間、幾度となく襲いかかる激震で6時間後に櫓やぐらなどの建物が崩壊してしまった。城の石垣や櫓が壊れ落ち「死傷するもの無数」、都会だった八代の町が、荒陵と化した。おそらく震度6強ないし7の非常に強い揺れと余

震で、消滅したのだろう。

●熊本では、記録に残る最も古いものとして、744年、天平時代にも大地震が起きたことがわかっている。今回の地震を起こした^{ふたがわ}布田川と^{ひなく}日奈久の2つの断層帯は数100年単位で激しく動いている。

●さらに八代の麦島城の天守閣が崩壊した同じ日、同じ午の刻に竹田の岡城が地震で崩れ破損した。つまり、熊本が揺れ、その6時間後には、大分竹田の断層も、城を壊すほど激しく動いたのだ。今回同様、熊本の地震が大分にまで広がっていた可能性が高い。

●東北で震災が起き、その数年後に熊本で都市そのものが壊滅するような地震が起き、その地震が大分にまで広がった。つまり、今回と非常に似通った地震活動が400年前に起きていたとみることができる。

●その後熊本と大分の地震から6年後の1625年に広島・愛媛・熊本・香川で地震が連発。広島は、八代、熊本、竹田を通る断層群の延長線上にある。震度6ぐらいで石垣や櫓が崩壊したと思われる。

●同年4月、今度は愛媛を地震が襲い道後温泉が地震でふさがった。7月は再び肥後熊本で大地震が起き、相当な被害があったようで「丁巳雑録」という史料ではこんな内容が記されている。

「(旧暦6月)17日に揺れ始めて、天守その他城内の建物が崩れ、瓦も飛んで骨組みの木材だけが残った。城中にいた50人ばかりが死んだ。火薬庫が地震で爆発し、跡形もなく吹き散らした」

熊本藩細川家の「部分御旧記」には、「本丸には庭がなく四方が高石垣。そのうえ、櫓・天守もなかなか危ない。許可を得て、地震屋(殿様の地震避難舎)を建てる庭を造らねば、本丸にはいられない」というような記載があり、余震が続いたことがうかがわれる。さらに同年11月上旬には「四国中国大地震」という記録が香川県に残っている(「田宮物語」「長尾町史」)。

●つまり「400年前の東日本大震災」のあとには、国内最大級の活断層である「中央構造線断層帯」の西端の熊本・八代でまず地震が起き、大分・広島・愛媛・香川へと西日本の中央構造線を東に向かって、次々と地震が連発した形跡がある。

川内原発の運転継続と伊方原発再稼働を止めましょう！